

メディアからの情報を読み解く力を育む単元の開発に関する研究

～中学校国語科でインターネット情報の評価と新聞記事の比較を通じた実践～

学籍番号 17AX012

氏名 山崎翔平

1. はじめに

2016年のアメリカ大統領選以降、「フェイクニュース」は学校教育におけるインターネット上の情報評価能力の育成の重要性を浮き彫りにした。

一方、H29年に告示された国語科学習指導要領では急速な情報化を背景に「情報の扱い方に関する事項」が新設された。その中の中学校第3学年の「情報の整理」の目標は「情報の信頼性の確かめ方を理解し、使うこと」とされており、国語科における情報の領域が拡大されていることがわかる。これまで国語科ではメディア・リテラシー教育の実践を蓄積してきたが、「情報の信頼性」を確かめる方法を学ぶことはこれからの学校教育にますます求められていると言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中学校国語科において、第2学年を対象に、メディア・リテラシーと関連が深い単元を開発・実践し、評価することとする。

3. 研究の方法

①学習指導要領とメディア・リテラシーの関連の分析

浅井(2011)は「受け手の批判的思考力」「送り手の批判的思考力」「メディアと関わる知識と技能」の3観点から現行の学習指導要領とメディア・リテラシーの要素の関連を分析している。これらの観点から新学習指導要領とメディア・リテラシーの関連を明らかにする。

②実践Ⅰ「情報の信頼性の確かめ方」を理解し、活用することを目指した実践

本実践ではインターネットの記事を題材に、CRRA Pテストを用いて情報を評価することを行う。CRAAPテストとは、カルフォルニア州立チコ・キャンパスの大学図書館が作った情報及び情報源評価システムである。なお、CRAAPテストは坂本(2018)が中学生・高校生を対象にした実践の際に和訳しているため、それを使用した。

③実践Ⅱ 新聞記事の比較を通して事実を吟味する力を育むことを目指した実践

阿部(2003)は『事実』と『意見』を区別することを重視しながらも、『事実』の中には意識の有無に関わらず、書き手の世界観、思想が含まれており、マス・メディアが取り上げている『事実』を吟味することがメディア・リテラシーを育むことにつながると主張する。本実践では複数の新聞記事を比較することで、選択された事実を意識化し、発信者のものの見方・考え方を解説することを通して、メディア・リテラシーの育成をねらいとした。

4. 評価方法

中学校2学年の生徒140名に対し、「マス・メディアに対する批判的思考の傾向性」「web情報に対する批判的思考の傾向性」「web情報に対する批判的思考の技能」について質問紙調査を実施し、授業前後の変容を分析することとする。なお、質問紙には後藤(2006)、坂本(2018)で用いられたものを使用した。

5. 結果と考察

質問紙調査の結果、メディアからの情報を読み解く実践を行なったことで、「マス・メディアに対する批判的思考の傾向性」「web情報に対する批判的思考の傾向性」「web情報に対する批判的的技能」について意識や技能が向上したことが示唆された。

6. 参考文献

- 阿部昇(2003)文章吟味力を鍛える, 明治図書, 東京
浅井和行(2011)新学習指導要領におけるメディア・リテラシー教育の要素分析, 京都教育大学教育実践紀要, 11:209-218
後藤康志(2006)メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究, 新潟大学大学院博士論文
坂本旬(2018)学校図書館とオンライン情報評価能力の育成: 法政大学資格課程年報, 7:5-16